

航跡

雷擊人生歷史

33 期雷撃人生歴史

第5分隊 市川 英彦

1 学生時代と海軍

1.1 ゼロ戦空中分解の話

昭和16年2月、すでに制式兵器として生産されて中支戦線で活躍し、中国駐留のアメリカ軍から恐れられていたゼロ戦が、2機相次いで木更津上空で空中分解した。制式兵器として採用され生産された141機目と142機目である。これでは、米国と戦争することが出来ない。早速、その解明が航空技術廠を中心に開始された。その議論のなかで、設計には間違いはないと信じている委員会メンバーにその事実を証明するため、委員の一人であった某パイロットが自らの操縦で、空中分解の様子を対策委員の方々の目の前で、再現して見せたと云うことがある。

委員が整列して見守る横須賀航空隊滑走路に向かって急降下し、地面すれすれに引き起こした。当然の結果として空中分解し、搭乗員は滑走路に叩き付けられ死亡した。富沢さんは、佐官待遇の文官技術官として見守っていた一人であるが、国を思い事実を委員に実証して死んでいった、そのパイロットの姿を思い出すと万感胸に満ちて、忘れることが出来ないと言っておられた。

このお話をして下さった富沢裕さんは今もご健在で、鎌倉の小町にお住まいである。その後、翼のフラッター現象が原因であることが解り、当時の手廻し式タイガー計算概を日夜駆使して解決し、昭和16年7月には再び生産を開始し、終戦までには1万台のゼロ戦を生産した。日本の飛行機の量産記録ではなからうか。

1.2 改3航空魚雷納入の話

91式航空魚雷改3は、真珠湾の浅い海で使用するため開発された航空魚雷であり、真珠湾で初めて実戦に使われた言わば量産試作品である。以下は当時、三菱兵器(株)の発射場主任をしておられた佐藤加賀生さんからお聞きした、最初の91式改3航空魚雷100本の納入にまつわるお話である。

昭和16年の明治節の日に軍令部から11月15日迄に100本の91式魚雷を整備して佐世保軍港停泊中の空母に届けるという至上命令を受け、堂崎の発射場全員が文字通り、不眠不休で頑張っていた当時のお話です。

頭部に装着することになっていた、ネットカッターの製作がやっと間に合ってホットしたら、今度は、着けなくてよろしいということになった。パールハーバー向けとは夢にも知らないので、これで雷道が安定すると喜んでいました。

突貫作業の何日目だったか、何の予告もなく源田航空参謀が発射場に来られて現場を視察され、何か問題点はないかとのお話があった。丁度「安定器」の製作が遅れ気味で不足する心配があったので、苦しい時の神だのみと事情を申し上げた所、明日の夕方までになんとか

都合をつけようのご託宣。これはいくら源田さんでも無理だろうと思っていたら、予定時間にびたり大村空から受け取りに来いと連絡があり、嬉しくもありびっくりもした。横空と大村空の間に定期航空便があったことを知らなかった。

第一回分の納入魚雷を団平船に積み、汽艇でひっぱりながら堂崎から大村湾を北上、針尾の瀬戸をぬけていつもの軍需部の岸壁でなく、指定された空母「赤城」の艦尾に団平船をつけてから、周りを見廻してびっくりした。何しろ空母といっても、鵬翔、加賀、赤城位しか見たことのないのに、飛龍、蒼龍、瑞鶴、翔鶴と見たことも聞いたこともなかった空母が軍港一杯に詰まっているのを見て、びっくりすると共に、この空母が使うのに間に合わせるだけの 91 式は月産何本必要だろうか？とつまらぬ胸勘定をした。

量産試作 91 式改 3・100 本の納入は、ついに 11 月 15 日には間に合わず、空母加賀1隻を残し、連合艦隊は北千島に向けて出航してしまった。加賀が連合艦隊を追って佐世保を出航したのは 11 月 17 日だった。

1.3 最初から解っていた敗戦

開戦後、何日も経っていない 12 月 15 日、真珠湾攻撃・マレー沖海戦で世間が戦勝気分酔っていた。その日、突如、飯倉の水交社に集まれと云う指示があった。ドイツからの最後の引上船で、頼大佐、奥中佐が帰って来た。帰朝報告を聞くのだと云う。その席上海軍大学校から東大に派遣されている耳塚少佐が私に向かって

「おい、市川、この戦争勝つと思うか」

「始めた以上、勝たなければ・・・」

「ふーん、そうか。お前、工学部の学生だな。鉄の生産量知ってるか」

「はい、知っています。1千万屯」

「米国は？」

「1億屯」

「それで、この戦争勝てると思うか」

それ以来、私は、何時どんな具合に負けるのかな！とばかり考えていた。

シンガポール陥落の時、英国から講和の申し出があったと聞く。それに応じていれば、戦争は一応勝ったことに成ったかも知れない。然し、若し歴史がそんな風に動いていたら、今の日本はどうなっていたのだろうか。

1.4 改1樞板

私は東京工業大学機械工学科に入学すると直ぐ海軍学生を志願し、幸いにも合格した。従って、大学生活は、親に金銭的厄介を掛けず、自費で通学した。でも授業料は親に払って貰ったと思う。私が雷撃専攻の海軍学生になったその年の採用はたった 1 名。前任には、温厚篤実なクリスチャンだった田中雄太さん、それに2年先輩の鈴木聡さん、檜貝六合光さんの3人。私は、雷撃専攻の海軍学生としては4人目だった。その先輩も、田中雄太さん、鈴木聡さ

んは、既に帰らぬ人となり、檜貝六合光さんは体の不調を訴えられ、殆どの会合にご出席頂けない。寂しい限りである。

私は開戦前・昭和16年の夏休みから、横須賀の航空技術廠支廠に実習に行っていた。航空魚雷が艦本2部から航空本部に移管になった後も、給料は最後まで艦本2部に貰いに行っていた。海軍省の正面玄関の、誰も昇り降りしていない赤い絨毯の階段の中央を、堂々と昇って行けと教育された。左に曲がると艦本2部があった。

夏の横須賀実習は、主にハワイ攻撃を目標に開発された、安定機の付いた改3魚雷の調整実習と、観測船(約100t)に乗って猿島沖での射点観測であった。加速度制御が必要であった理由の勉強と、その複雑な構造の制御弁の実習は結構頭の訓練になった。

昨年(H9)の経営工学部会の新潟見学会で見た、田植機に使われていた安定器が、全く91式改3魚雷の安定器と同じ構造であったのは感激した。60年前の海軍が開発した機構が、まさか農機に応用されているとは知らなかった。その会社が1~2年前に開発した新製品だそうである。

猿島の内海は結構な広さがあって、海岸は海水浴場、その海岸を電車(今の京浜急行)が走っていた。小学生・中学生の頃、駆逐艦の艦長だった従兄に連れられて、海水浴に行った事を覚えている。従兄はよく「おい！猿島迄泳がんか」と云っていたが、当時の私には猿島迄泳ぐ力は無かった。その反対側が猿島沖発射実験場になっていた。

猿島沖の射点観測は、常に基地航空隊との無線連絡で観測準備等をした。猿島と云うと、今では若者の海水浴キャンプ場で、簡単に日帰りで楽しめる所だが、当時は船の性能その他で、そう簡単には行き来が出来ない。午前の発射実験が終ると、午後の発射実験までの間、観測船は沖に停泊して次の指令を待っていた。その間、結構な時間が有ったので、確か昭和17年の夏期実習の時だったと思うが、工大同級生の中山君も雷撃の技術学生になっていて、一緒に射点観測を命ぜられたことがある。観測船の操縦をやっている下士官に尋ねると、十分時間がありますと云うので、射点で魚雷からはずれて海に流されて行く框板(キョウバン)を二人で取ってこようと、海に飛び込んで流れて行く框板を追いかけた。随分泳いだがなかなか框板に追い付けない。波頭に上がった時振り返ると、観測船は遥か彼方に小さく見える。框板はもう直ぐそこに見えるが、今まで泳いだ距離を考えると、まだまだ相当泳がないと框板にたどり着けない。二人は相談した結果引き返すことにした。

後で聞いた話だが、観測船では二人が若しこのまま、まだ框板を追いかけて泳ぐようだったら、内火艇を出して救助に向かうことを真剣に考えていたそうである。下士官曰く、「何しろ、将来、我々の上官になる方々をお預かりしているんですからね」

観測船の下士官には大変迷惑を掛けた。91式航空魚雷は木製の尾翼を付け、海面への射入性能を安定させた。その木製尾翼を框板と呼び、框板を付けた91式航空魚雷を改1と云っていた。

船に戻っても、未だ午後の射点観測の時間迄は十分に時間があつた。こんな事までして框板を追いかけたのは、框板は実に立派な材料で出来ており、毎回海に捨ててしまうのは、誠

に勿体ない。立派な製図板としても使える。綺麗で作業台に使える。そう考えてのお遊びだった。その日、その時刻は丁度引き潮で、若し框板に追い付くまで泳いでいたら、多分東京湾の外に出てしまったかも知れない。

1.5 片島発射場の瀬戸

1900年(明治33年)大日本帝国海軍が切り開いたと云う「万関の瀬戸」の話は印象的だ。パナマ運河は1904年5月4日着工・1914年8月3日開通だから、それに先立つこと4年、日露戦争に備えて対馬の兩岸を結ぶ運河を開設したとの事であるが、明治維新から僅か30年、日清戦争の疲れも残るあの時代に、艦隊の往来出来る運河を開設したとは驚きだ。

地震のコンサルタントとして、何時も一緒に仕事をしている友人から送られた対馬の国道災害防止調査報告書のこの件(クダリ)を読んでいて、川棚海軍工廠を作る時の小さな海峡の埋め立て工事の事を思い出した。工廠の近くに片島と云う島があって、そこに、納入前にテストをする領収発射場があった。対岸から僅か数十mの海を渡るのは大変だからと、当時、川棚工廠の建設を担当していた坂本義鑑技術大佐の発議で、その海峡を埋め立てることになった。最初は簡単に埋め立てが出来るものと思っていたらしいが、幾ら埋めても底無しである。調べて見たら、水深が200m以上もあったとのこと。帝国海軍ともあろうものが、パールハーバーの海底図は詳しく知っていても、自分の工廠脇の海底図型を知らなかったと云うドジ。私の学生時代にあった本当のお話。

1.6 爆弾魚雷

夏休み2回も横須賀の航空技術廠で実習をすると、海軍精神も多少芽生えて、雷撃部長成瀬正二少将等とも、階級を越えて冗談を云える様になってくる。昭和18年になると卒論を提出する必要がある。私は考えた。海軍にこれだけお世話になっているのだから卒論と云っても、多少なりと海軍のお役に立つ事を課題にしたい。「どうだろう。卒論の課題を空技廠から貰って来ないか」と同級生である中山海軍学生に相談した。「そんなこと出来るものか」、彼はそう答えたが私はやって見たかった。そこで航空技術廠に行き成瀬部長に相談した。その結果話は成立し、「模型を作ってやるから、その境界層実験をして呉れ」と云う事になった。卒論担当の板谷先生は、とてもじゃ無いが海軍がそんな課題を与えて呉れるとは、夢にも思わなかった。「問題は模型だ。それは何時渡されるのか」と心配されて居られたが、何と話が纏まって、たった1週間で取りに来いと連絡があった。これには、板谷先生を始め皆さんが、流石海軍と感嘆したものである。

こうして入手した爆弾魚雷(勿論当時は、私以外の人は、新型魚雷としか知らされていなかった)の模型に、境界層を測定する時の静圧を得る為の孔を設置し、その孔からパイプを敷いて、傾斜マンメータまで持って来る作業。頭部については、色々考えたが、結局鋳物を作り、それに測定用の孔をLong Drillで加工すると云うことまでしたから、立川飛行機で実習した板金絞り加工の技術、浜松高工で実習した6呎旋盤の製造加工技術が、全部工大の実習工場

で役に立った。ところが、後に神戸製鋼所に就職した時、鋳物工場の組長から「市川さん！鋳物は金偏に寿ですよ」と云われた。その時、私は怒鳴り付けたことがある。その鬆(ス)に悩まされた。圧が漏れて全然測定にならない。その時、始めて真空含浸を体験し、その難しさも理解した。それに最も劇的に役に立ったのは、渡辺孫一郎先生に教えて頂いた計算図表である。

実験は、水力実験室のベルトン水車に次ぐ大型装置である風洞を使用した。空気と海水との換算は海軍がやるから、とにかくデータをよこせとのこと。初めは1回測定する毎に $V = \sqrt{(2gh/\rho)}$ の計算をして記録していたが、数万点に及ぶ測定データでは、傾斜型マノメータは簡単に読めても、風速の計算となると毎日の気圧・温度・湿度は変るし、タイガー計算機では時間が掛かって、卒論・完成の見込みが立たなくなって来た。そこで気が付いたのが計算図表。浜松高工の福原達三先生・工大数学の渡辺孫一郎先生の姿が頭に浮かぶ。計算図表を使うと、求めるデータの付近だけ、必要な精度でスケールを作れば目的とする精度で計算が出来る。然も計算は定規を当てる丈。今の電子計算機と較べても、問題にならない程早い。そこで計算図表の作成に取り組んだ。勿論、タイガー計算機を使ってやった。しかし、その作業は並み大抵の労力では無かった。こんな計算位で、こんなに労力が必要だとすれば、昭和16年2月、既に制式兵器として採用され生産されていたゼロ戦141号機・142号機が、相次いで木更津で空中分解した時の対策はフラッター現象。これに真正面から取り組み、然も同じくタイガー計算機しか無かったのだから、松平精さんのグループは大変だったろうなあと考えた。

結局、数枚の計算図表が出来たのは、論文提出期限の1ヶ月少し前。それからは、マノメータを読むと即座に計算が完了するので、風洞計測は忽ち完了し、十分余裕を持って論文提出を果たすことが出来た。私はあの大電力を使った風洞の電力節約にも貢献したと自負している。

その後、神戸製鋼所でも、計算図表を作って、電気自動車の生産管理に役立てたから、計算図表を作るプログラムは是非作り度いと思っている。

後で聞いた話だが、その流線型をした今迄見たことも無い形をした模型は、爆弾魚雷と云っていたが、もうその頃(S18)から、間もなくエンジン付き自動制御の魚雷等を作る余裕は無くなるであろう。その時に備えて、神風特攻隊が急降下して敵艦の舷側に落す魚雷を考えていた。魚雷の尾翼には固定翼を装備し、海中に入ると ρ が急に1000倍にもなるから、固定翼が作動して上げ舵となり、艦底起爆する様に設計され、3式金物と同じ作用をする様に計画されていた。その固定尾翼の設計資料にするデータが欲しかったとのことであった。神風特攻隊が間違っても敵艦そのものに当てても、爆弾として働くことが出来る様に設計してあったから、爆弾魚雷と云っていた。この計画は終戦まで実現しなかった。

計算図表については、卒業論文の時は、何の様なものを、何枚位作ったか、その大きさは何の位だったか、当時の論文がどんな風に書かれていたか等興味もあったので、東京工業大学の図書館に照会した。すると、その翌日(H10-4-22 水)「ありました。何時お見えに成りますか」との電話連絡。早速、その日の内に見に行った。懐かしい60年前の自分の字で善かれた

卒業論文は、誠に保存状態が良く、青図等も変色もして居らず、紙もしっかりしていて、論文と付属図面類の2冊に製本されていた。工大図書館の保管管理の良さには感心した。その帰り水力実験室に寄り、風洞を見、居合わせた学生に未完成乍ら「33 期雷撃人生歴史」の出来ている所迄手渡して来た。学生は話を聞いて感激していた。

1.7 学生時代の心痛

「4 改 1 框板」で述べたように、私は大学入学直後に海軍学生になった。当時は、永久服役の海軍学生は東京大学の学生が大部分で、檜貝六合光さんと私とは例外。未だ開戦前でもあり、海軍学生が集まって何かをすると云うことは無かった。昭和 17 年になると、堂々と雷撃専攻の海軍学生を沢山採用し始めた。当然のことながら、私より頭の良い優秀な学生が難関を突破して雷撃専攻の海軍学生になった。他の専攻を選んだ学生も含めて、工大にも海軍学生が俄に増え、海軍学生の集まりも度々開かれる様になった。それら学生の中には3年生も多数いた。学校では私の方が2年生で後輩。所が海軍学生としては、私の方が先輩。当然海軍からの連絡等は私の所に来る。私に取纏める様指示がある。結果として、私が学校の先輩に号令を掛けることになった。このことは私にとっても辛いし、号令を受ける先輩にとっては、事情を知っている者はいざ知らず、そう云う前任・後任の關係に理解のない3年生からは、大変な恨みをかけた様だ。実際に任官の時は、私よりも1年先に任官するから、私より先輩になる。

2 訓練・着任・技術科士官生活

2.1 青島訓練と照国丸

青島での訓練は、33 期 2 千余人総てが印象に残る 4 ヶ月であった。戦後、計画された第 1 回の技術科 33 期青島訪問団を始め、色々の機会に 33 期の殆どの人が、何らかの手記を残して居られる。入谷分隊監事作詞・太田栄一作曲の「33 期に寄する歌」は、その辺の感情を余す所なく表現している印象深い歌である。

技術科第 33 期会に寄する歌

作詞 技大尉 入谷宰平

作曲 四分隊 太田栄一

1. 嗚呼今日よりは我が命、君に捧げて顧みず
醜(シコ)の御楯と出立つと・天地(アメツチ)御代の大恵 共に語りし 4 ヶ月
2. 八関山の影闇き 黎明夙に起ち出でて
凍れる土を踏みならず 二千余人の雄叫びは 一つの声と響きけり
3. 汗と砂塵の匯泉源 父祖の忠魂に応ふべく
脚も折れよと踏みゆけば その靴音は原をこえ 四方の岩山庄しけり
4. 蒙古嵐は吹荒び 飛沫は櫓に凍れども
あゝ感激の軍艦旗 波間にしろくはためけば 熱き血潮は高鳴りき
5. 太平角の岩頭に 寄せ乗る波の音速く

- 息を限りと駆け来れば 黄海水は蒼くして 浮山は高く聳えけり
6. 小珠山下に海光り 赤き薨の高楼に
入日茜にさす時は 独逸霸道の夢遂ひつ 東亜の朝をおもひけり
7. 南の洋の血の叫び 波路遥かに聞く時は
我が持つ技術(タクミ)揮はばと 憤慨腕を撫しつつも
訓(オシエ)の道を励みけり 諭(サトシ)しの道を努めけり

その当時青島には、上野の東京市立第2中学校出身の先輩、杉浦総領事が駐在していた。彼は「お前達は、海軍士官になるための訓練にこの青島に来ている。隊内では旨いものを十分食べていないだろう。日曜外出の時は領事館に來い。中国料理をタラフク食べさせてやる」と云うご託宣。そこで日曜外出となると必ず領事館に行くのが日課だった。だから外の皆さんと違って青島の街の印象は殆どない。この間亡くなった喜多川洋治もその一人である。

海軍の訓練はその概要を知っていたので、硬い花崗岩の岬を回るランニングで、足の裏が酷く痛かったことを覚えている位で、軍事訓練にしても、兵科の訓練からすればものの数では無いと感じていたから、余り印象が深くない。

私が一番印象に残っているのは、バランスを崩して傾いたまま、船団について行く貨物船・照国丸の通信士であった下士官のことである。残念乍らお名前を忘れた。我々の船団を敵の潜水艦から護って呉れている小さな駆潜艇との交信は、光信号・手旗信号で総てが照国丸に送られて来る。外の船の通信士は、まだるっこしくて相手に出来ないのであろう。「今、潜水艦のスクリュウ音が聞こえたから、索敵に向かうと云って来ましたよ」。その下士官が簡単に説明してくれるから、駆潜艇が去って行っても安心感がある。その情報は改めて照国丸から外の船に伝えられた。私は中学校以来手旗信号には自信があったが、とてもじゃないが、その下士官のスピードにはついて行けなかった。

2.2 内地到着の思い出

呉での前任・伊藤清君との別れは、私の心の隅にソーッと残っている印象である。軍隊の中で、前任・後任という関係は難しい。私は工大在学時代に、I-1で述べたにがにがしい経験をしている。第5分隊の前任は伊藤清君である。青島の訓練の間、私は前任という地位ではなく次席の地位にいた。だから、2年間の工大・海軍学生の際の苦しみから解放されて、誠に気楽な青島訓練生活であったのである。それが又もや、第5分隊の前任という形で照国丸に残ることになった。今度は海軍省からの伝達ではなくて、何かあれば私の判断で命令を出さねばならない立場である。然し、もう全員士官の卵。各々、任地が決まっいて、上陸すれば自分で各々交通機関を利用して、各々の任地に向かうことになっている。その点工大時代の様な緊張感は時間と共に薄らいで行った。呉港で、去って行く内火艇に乗って、照国丸に向かって敬礼する伊藤清君を送る時、「敬礼！帽振れ！」と号令した。これから又、前任。大変だと云う感覚が湧いて来たが次第に薄れて行った。

2.3 航空技術廠着任

確か10名位だったと思うが、雷撃専攻の見習尉官と一緒に、金沢八景の航空技術廠支廠雷撃部に到着したのは、雪の降る寒い日だった。各見習尉官は各々に任務が与えられ部署に着いた。

私は、その時、成瀬正二技術少将から部長室に呼ばれて、「お前を採用したのは、航空魚雷を量産したかったからだ。お前は何回も学生時代に夏期実習をしている。91式魚雷のことは良く知っている筈だ。好きな丈、実習して納得したら、なるべく早く川棚に行け。そして増産をして呉れ」と云う命令を受けた。何日間か忘れたが、逗子の豪邸・加賀別荘に寄宿して航空技術廠通いが続いた。

私の2回目の夏期実習では、こんな思い出がある。雷撃穰に体験同乗させて呉れる機会があった。当然、前任順と云うことになる筈である。然し私は、その時、私は永久服役だから、何時でも雷撃機に同乗することは出来るだろう。そう思って、短期現役の学生を優先して、体験同乗をして貰った。ところが結果は反対で、私はとうとう終戦迄、雷撃機に同乗の機会はなかった。その雷撃部には、実験の為、雷撃機を操縦する下士官が良く打ち合わせに来た。

残念乍ら名前は忘れたが、その内の一人の下士官が、昭和19年の夏、わざわざ川棚に寄って、艦底起爆を目的に開発した凧曳行式の三式爆発尖を、始めて実戦に使った時の報告をして呉れたことを昨日の様に思い出す。使用した飛行機は1式陸攻、場所はブーゲンビル。海戦は大勝利。只1隻残った敵の重巡を、ものの見事に1本の91で沈めたそうである。艦底起爆だから、その重巡は傾かずにそのまま沈んで行った。

2.4 川棚着任

何時航空技術廠を離れ、何時川棚に着任したかは、さだかに覚えていない。吉川康治君に依ると、彼と京都駅で落ち合い、同行して佐賀県牛津の親戚に泊り、佐世保鎮守府に挨拶して川棚に行っただと云うことである。川棚に着任して見ると、奥大佐が工務主任、田中雄太さんが第1工場主任。それに、作業係にも、第1工場にも、鑄造工場にも、調整工場にも、それぞれ33期の士官が青島から直接既に着任していた。心強かった。ここでも些か、前任・後任の問題無しとしない。でも、同期33期の者には、後から川棚に着任した者が前任であることに、抵抗感は無かった様だ。技術科33期の団結振りは、後述の調和器改良の時、遺憾なく發揮された。正に「同じ青島の庭に咲く」同期の桜であった。

転任して行った任地については、定かではないが、第1工場主任田中雄太さんが転任され、後任に檜貝六合光さんが見えて、喜んだのも束の間、神田大尉が工場主任になられた。その間、私は、ズーッと第1工場(主機関担当)の前任部員を努めていた。

着任して先ず感じたことは、工員は全部、徴用工員と中学校・高等女学校の上級生ばかりであったことだ。九州全土から学徒動員と称して担任の教諭の引率で、川棚に来て、毎日、工員宿舎から隊列を組んで登庁していた。学徒工廠と云っても良いだろう。私は、これら学徒

が、一番勉強しなければいけない時期に、学問を捨てて旋盤の前に立ち、やすりを持って作業台に向かっている姿に心を痛めた。

松縄(後に小平と改姓)部員と相談の結果、第 1 工場に配属になった学徒には二人交代で毎週 2 回、午前中に 2 時間「数学」と「物理」の講義をすることにした。せめて、それ位のことは、この若い学徒の頭に植え付けて置き度いと思った。若し担任の教諭が教えていたら、問題になったかも知れないが、工場の工場先任部員が講義しているのだから、文句の付けようがない。この講義は、石木の疎開工場への移転に伴う組織変更で中止になった。次に、その講義の一節。

今諸君はメートル法で教育を受けている世界の先進国的存在である。ところがこの工場でも現場へ行くと、道具の多くは、吋。ヤード・ポンド法で呼ばれている。明治以来の文明開化の名残である。それより前は尺貫法。例えば尺貫法の場合、1 里四方の面積は、何坪かと云われた場合、覚えていれば良いが、知らなければ、計算は、それこそ大変。

$$6 \text{ 尺四方} = 1 \text{ 坪} \quad 1 \text{ 里} = 36 \text{ 丁} = 60 \text{ 間}$$

$$1 \text{ 里四方} = (36 \times 60)^2 \text{ 坪} = 4,665,600 \text{ 坪}$$

国の土地登記を考えた丈でも大変。更に圧力・速度等の計算になると尺貫法では面倒で、計算出来ない。欧米のヤード・ポンド法でも同じで、12 吋 = 1 フィート 36 吋 = 1 ヤード 63360 吋 = 1 マイルだから、科学計算は大変。そこで、その昔(1700 年代)フランス政府からの委嘱に依りアカデミ・デ・シアンスの 13 人の学者が 10 進法の物差しを作ることになった。基準になるものとして、当時は永久不変と考えられていた地球の寸法を採用しようとするので、これまた 13 年間掛かって、当時の物差しで北極から赤道迄の距離を計り、その 1 万分の 1 を 1km と名前を付けた。さて皆さん！地球の直径は幾らですか。これから先は読者への宿題。

所で、面白いお話の最後に突然出された質問に対し、佐世保中学のクラスは、半分以上の生徒が計算を始めました。島原高女の生徒の場合は、計算を始めたのは、クラスで一番オマセな体格の良い級長一人でした。

2.5 調和器の改造

着任して暫くすると、組立完成品魚雷の領収発射の成績が非常に悪いことに気が付いた。調べて見ると、全部の魚雷が発射框から発射されて 2000m 走行し浮上する迄に、雷速が 2 ノット低下している。その特性のまま、調整に依って雷速を 40 ± 2 ノットに納める様、組立工場に調整を要求されていたのである。私は考えた。雷速を一定にすることが出来れば 38 ノットから 42 ノットと云う広い幅の規格に納めることは簡単。何故 2000m 走行の間に雷速が 2 ノット以上も落ちるのだろうか。

昔から魚雷は、気蓄器から主機関に空気を送るには、調和器を使用して、厳密に 10kg/cm^2 に調圧して送る様にしていた。之に依って雷速を一定に保つことが出来ると信じ切っていたらしい。その為わざわざ 2 段調和器が採用されていた。雷道全行程をクエサイ・スタチックに考えていた。

調和器の1段目に掛かる圧力は、 300kg/cm^2 から敵艦に当たる時には 50kg/cm^2 位迄低下する。その元圧の低下に対応して、2段目の調和器からの出力を一定に保つ工夫がしてあり、その調整はベテラン工長の腕一つに任されて屈・た。

91式魚雷は、飛行機で運ばれる。 -50°C の世界を飛ぶ。魚雷全体が -50°C になった状態で $30\sim 0^\circ\text{C}$ の海中に投下される。当然、熱歪が起きる。もっと激しいのは、燃焼器の発熱である。熱走魚雷になってから、燃焼室では、 1400°C 。之に水を噴射して冷えたとしても 800°C 。その燃焼ガスで蒸気機関宜しく動力を発生するのであるから、エンジンそのものも膨脹する筈である。設計図を解析して見ると、常温から 1000°C 位迄に弁のリフトが10%低下する理屈になる。出力が低下するのは当然だ。それなら一段調和器で、気蓄器の圧力低下と共に調和器の出力圧を10%upさせてみよう。之が着想である。

渡辺孫一郎先生の偏微分の講義を思い出した。温度に就いての偏微分係数を計算し、第1調和器に適用してみた。その結果、調和器の弁座径の寸法にリミットを付けて、機械加工で精度を出すことによって、ベテラン工長の調整を廃止することが出来た。部品の寸法管理のみで、組立てさえすれば、合格するエンジンが出来る様になったのである。

機械工場からは、工数が半減したと云う評価。鋳物工場からは、当時入手が困難を極めていた空気調和弁に使うネーバル黄銅の使用量が半分以下になったと云う評価を得た。そして魚雷の生産は、何の設備増強もせずに一挙に3倍に跳ね上がった。

工場長は、この実験を許可するに当たり、「91式改3魚雷5本の借用を許すが、1本2万円もする魚雷だ、射沈等させて紛失するなよ」と云われた。海軍は原価計算をしていたし、国民の血税だ、無駄遣いするなと云う意味である。

考えて見ると艦船魚雷では、射程4万mを想定していたから、最初の2000m位の雷速変化は問題でなかったのであろう。クエサイ・スタチック的設計で事足りていたのだ。航空魚雷の場合は、その最初の2000mの間に起こる条件変化が問題であったのである。

2.6 気室の素材

戦後になってふとしたことから、あの戦時中、毎月300本もの気室の素材が川棚工廠に送られて来た由縁に就いて、病床の朝熊利英海軍技術中將からお聞きすることが出来た。朝熊中將が大阪の住友病院にご入院になった頃、私は度々病院にお邪魔した。ある日、中將は、大正年間に、ドイツのクルップから気室の鍛造の為、フォージグ・プレスを1台輸入して、魚雷の気室を一発でフォージグする様にしたと云うお話をされた。愈開戦と決まった時、もう1台輸入することにしたが、戦争が始まってしまい、2台目のフォージグ・プレスの最後の部品は、潜水艦で運ばれて来たそうである。若し、その最後の部品を運んで来た潜水艦が撃沈されていたら、主機関の方が300台出来ても、気室のフォージグが間に合わなかった筈だったとのことである。

大正年間から気室のフォージグ・プレスによる量産化を考えて居られた朝熊中將の先見の明には、頭の下がる思いがする。

3. 終戦間近の職場

3.1 石木への工場移転

私は見る機会が無かったが、終戦後米軍が川棚に上陸したとき持って来た地図には、川棚海軍工廠はピール工場だと記されていた。大変な費用と人力とを掛けて、海岸工場を石木の山の地下又は半地下工場に移転する必要は、結果的には無かったのであるが、S19年から20年に掛けて、海岸にあった工場の殆ど全部を石木郷の山間部に移転した。私はその最初の計画から、各々の工場の分担作業に移る迄の間、工場移転の総指揮に当たった。

工場移転が始まると、城山の官舎から今迄と反対向きに山道を石木の工場に通った。30分位の距離であったが、目白の群れと追いつ追われつする楽しい通勤だった。ある日、何時もの様に、城山を登り目白の群れと一緒に石木郷に向かって歩いていた。川棚川を見下ろせる高台に来て驚いた。川棚川に掛かる橋の上に気室旋盤が、橋を押し潰して川の中に座り込んでいた。あれだけの大型機械だから当然と云えば当然。何故、事前に橋の補強をしなかったのだろうかと下らぬことを考えた。丁度、工場移転の為、施設部の大部隊が来ていたので、1～2日の内に橋の修復は完了し、数台の気室旋盤は、無事石木の山奥の半地下工場に納まった。

駐留している施設部隊の工事にはもう一つ、城山を貫き川棚駅と石木の各工場との連絡をする為のトンネルを作る工事があった。ある日、施設部隊から工場本部の会議室で打ち合わせ度いと申出があり、施設部隊からは赤い佐官旗をなびかせて、係官が工廠の正門に乗り付けた。交渉の相手は佐官待遇の施設部文官である。何事ならんと会議室に赴くと、その佐官待遇の施設部員は、誠に丁寧に挨拶された。私は別の部隊の文官とは云え、川棚駐留部隊の長官を勤める佐官級の方からの丁寧な挨拶に緊張した。

打ち合わせの内容は、工場専用の構内鉄道である城山トンネルに就いての、仕様変更の申し入れであった。立派な図面をもって来て、工期短縮の為、鉄道規格に定められた建築限界を破る工事をするが了承して呉れとのことであった。貨車の床下部分であり、魚雷の輸送には直接関係の無い部分であったので承認した。

そのトンネルは未完成で終戦になった。トンネル跡は、その土地の所有者が冷蔵庫代りに、今でも使用しているとのことであるが、一度見せて貰いたいと思っている。

3.2 忙中閑あり

石木に工場を移してから、機械工場・組立工場と云う形に組織変更が行われ、組立工場主任には山根少佐が着任した。闊達な兵科士官の様な方だった。

ある日、山根少佐が私を釣に誘った。

「お前、馬に乗れるか？」

「いや、乗ったことはありません」

「そうか、じゃ、こっちのおとなしい馬に乗れ」

何処からか知らないが、近所の部隊から2頭の馬を借りて来て、釣の道具も私の分も一式揃

えて下さった。2頭の馬は川棚川の支流を遡った。

「おい！あそこの泡の立っている所には 2～3 匹いるから、あそこへ針を放り込め、2～3 匹釣ったら俺のいる方へ来い」

その通り入れ食いで 3 匹釣って、山根少佐の釣って居る所に行くと、山根少佐は直ぐに川から上がって馬に乗り川を遡る。そして又、同じことの繰り返しである。楽しい川釣りの初体験であった。

この経験で私は川釣りの面白さを覚えた。そして、ハヤ等の川の小魚の習性を知った。戦後就職した会社の社員旅行等で川釣りがあると、借りた釣り道具を使って何時も優勝していた。終戦後、日本の社会情勢は大きな変貌をしたが、川魚の習性は敗戦でも変わらない。

3.3 主機関の下請け

ある日、二人の中年紳士が私を尋ねて来られた。あの重い 91 主機関の配気管の所を両側からお二人で持って、東京から汽車に乗って持参されたのである。後で知ったことであるが、お年を召した方は中尾源吾さん、もと海軍大佐。お若い方の方は松村久雄さんで、元短期現役の技術大尉でした。何処からどの様にして、91 式の主機関を製造することになったかは、私は知る由もなかったが、とに角テストをして呉れとの申し入れであった。割合に良く出来ていた。然し、終戦迄、東京理化学工業(株)から主機関が納入されたと云う記憶は無い。

戦後、中尾源吾さんが役員をして居られた「東京理化学工業(株)」は、川棚工廠跡に磁器工場を建設し、天皇陛下の行幸を仰いだ。又、戦後、神戸製鋼所で積算電力計を製造した時、その時計機構の文字車を供給して下さった。今でも文字車に関する限り、東京理化学工業(株)はトップメーカーである。当時はアルミ製だったが、今は半分以上プラスチックになっている。山武ハネウエルに就職してからも、精密なプラスチック部品で大変お世話になった。ユニークな会社である。創始者は小野田退役海軍大佐で、深く水雷に関係して来た会社である。

こんな会社もあった。主機関のシリンダーの内面研磨をしたから見てくれと持参した製品は、見るも無惨な加工でとても使いものにならない。聞けばご本人は新聞記者だったが、どうしても商売にならないので、こんなことをやってみたから見てくれとのこと。全くの材料の無駄使いといしか云い様がない。どうやって材料を入手したのか不思議である。

3.4 300 気圧空気圧縮機

先刻皆さんご承知の様に、魚雷は頭部が火薬を詰めた部分。次が気室と称して、発射時には 300 気圧の空気が装填され、主動力源として使用される。だから組立工場には 300 気圧の空気圧縮機は必須の設備である。この圧縮機を石木に新設するに当たり、設置方法について、前田作業主任と私との間で意見の相違があった。私は半地下で十分であると云い、前田主任はトンネルにしろと云う。

前田主任のお考えは、300 気圧の圧縮機は組立工場の最も重要な施設であるから、敵の爆撃に耐えるトンネル内に設置すべきであると云われる。私は工場が爆撃されれば、山の中の

仮設工場はひとたまりも無く破壊されてしまう。そうなれば、300 気圧の圧縮機も無用の長物になってしまう。それよりも何よりも、機械工場の機械と較べて、格段に大きい空気圧縮機を収容出来るトンネルを作る工事が大変で、石木移転の工期は大幅に遅れる。

こんなやり取りが交されて、結局私の案が採用され、石木の組立工場で移転直後から 300 気圧の空気が使える様になった。前田主任曰く、「市川には負けたよ」

3.5 ラップ式通信装置

谷を隔てて、向側にある工場との連絡が出来ない。電話線を敷く余裕がない。用がある度に廻り道して伝令を送る。これでは何かにつけて時間が掛かり、伝達される内容にも齟齬を来す。何とかならないものかと考えた。

頭に浮かんだのがゼンマイ手巻式の蓄音機。板谷松樹先生が、レコードからの僅かな振動を見事に高忠実度で拡声することを趣味にして居られ、自宅には見事な自作の蓄音機があると聞いていた。多少理屈は不明でも、とに角、蓄音機のラップに似た大型の聴音器の様なものを作ってみよう。この構想を若い副部員達に提案して見た。これは大成功で、ブリキの半田付けでそれらしき物が出来あがった。

木製のスタンドを作り回転出来る様にした。各工場の方向に向けて見ると、その工場内で話しているヒソヒソ話まで聞こえる。こちらからの話は大分拡声されると見えて、明瞭に聞こえると云う返事。電話器を設置出来ない山間工場間の連絡の有効な武器となった。

残念なことに私は、板谷先生が作られた自作蓄音機拡声装置の、ラップの設計理論を知らない。誰かご承知でしたら是非ご教授賜りたい。

4. 終戦は何処で

4.1 終戦時の川棚工廠

戦後になって益々感じたことであるが、朝熊技術中将は実に立派な方である。敗戦が決まった時、部員を集めて話をされたと記憶しているが、第 1 次大戦の時にドイツで体験した敗戦処理を例に引かれ、戦争は終わったのだから決して慌てることはない。後は交渉なのだ。工廠内を整理し、何時でも引き渡せる様に、設備のリストを作って置けと云われたことを記憶している。そして工廠長自身は、平和条約が成立した時に、工廠跡地の平和産業への転換計画を作成されていた。

後に、同期の者から聞いた他の工廠での混乱の様なことは無かった様に思う。寧ろ水交社に残っていた部員達は、上陸して来た米兵が持ってきた兵器の説明を聞いたりして、楽しく海軍の解散を待っていると云う感じであった。私は割合早く三重県に家内を連れて戻ったから、その他の詳しいことは知らない。台風で不通になった山陽線が開通した最初の列車で、再度残務整理の為川棚に戻った時に、そんな雰囲気を感じた迄である。赤坂大佐曰く、「ああ、市川！帰ってきて呉れたか。もう残務整理は終わったよ。無理して帰って来なくても良かったんだよ」

4.2 共に励んだ学徒・工員とのお別れ

石木の疎開工場移転に伴う組織改編で組立工場が出来、人員は 1000 人にも脹れ上がっていた。一生の中で一番大切な中学時代に、学業を捨てて川棚に来ている学徒を、敗戦となれば安全に親元に帰さなければならない。私は組立工場全員を山間の半地下工場の間の広場に集め、敗戦の報告をした。1000 人の内半分は女子高生、1/4 は中学生、残りは徴用工と技手・工手・職手等の幹部工員である。

私は先ず、学業を捨てて川棚に来て働いて呉れた学徒にお礼を云い、且つ、一生の内一番大切な時期に、学業を捨てざるを得なかったことにお詫びをした。そして、これからの日本を背負って立つのは、今日お別れをする若い学徒の方々である。戦争と云う歴史のいたずらとは云え、全然勉強の機会を与えられなかった大切な学業を、どうか若い力で取り戻し、将来の日本を立ち直らせる力になって欲しいと挨拶した。始めから負けると解っていた者の口から出た、心の底からのお礼とお願いであった。

4.3 城山の防空壕掘り

移転してようやく稼働を始め、前述の様に、海岸工場の時に比べて 3 倍もの数の組上がった魚雷、或いは組立途中の魚雷が並ぶ半地下工場を後にして水交社に戻った。官舎のある城山の頂上に来ると、1 人の朝鮮人が一生懸命防空壕を掘っている。昨日まで、日本人を含めてその防空壕を掘る為に集まった人に、日本語で防空壕を掘る目的を説明し、「お国の為です、ご苦勞様ですが頑張ってください」と訓示をして作業を開始していた朝鮮人である。彼に敗戦したことを告げる者はいなかったのだろうか。

その後、どうして敗戦を知ったか解らないが、翌日からはその姿は見えなくなった。民族の違い、今度の戦争に対する考え方の本音の部分での感情が、日本の敗戦を知ってどの様に現われるのか。そんなことがこの朝鮮人に、即座に敗戦を知らせる術を失わせたのであろう。然し、川棚では、朝鮮人による不穏な事件が起きたとはついぞ聞かない。今あの朝鮮人は何処にいるのだろうか。帰国したのだろうか。それとも日本に留まって暮らしているのだろうか。

4.4 廠長室勤務

残務整理に掛かってから 1~2 日後、赤坂大佐から呼ばれた。「廠長が、お前を呼んでいるから、直ぐ行け」とのこと。早速、廠長室に行くと廠長から「お前は英語が出来るだろう。1 週間掛けて良いからこれを解り易い英語に翻訳してくれ。それが済んだら、お前は故郷(クニ)に帰ってよらしい」と云うお達しがあつて、割合部厚い原稿を渡された。

その原稿は 2 種類あつて、一つは川棚工廠敷地跡に、自動車修理工場を建設すると云う計画。もう一つは前述の「東京理化工業所」が実現した、北九州特産の磁器工場の建設計画であった。この短時間に良くもこれ丈の、川棚工廠の転換計画を着想し、書き上げたものだと感嘆措く能わざるものを感じた。

それからは毎日廠長室に勤務して、その工廠転換計画の英訳に専念した。敵国語だと称して一切持つことが出来なかった英語の辞書や資料は、廠長室には十分過ぎるくらいあった。

幸にも期限迄に翻訳は完了したが、米軍の川棚進駐は大分遅れたので間にあったことになる。廠長は訳文を点検して「これで良い。良くできた」と云って下さって任務は完了し、赤坂大佐に報告した。「良かったな。それじゃ、お前は荷物を整理出来たら一度故郷(クニ)に帰れ。落ち着いたら一度川棚に來い」

こんな訳で、私は、米軍が進駐して乗る前に川棚を離れた。

5. 終戦で帰った時

5.1 奥津の生活

戦後一時家内の実家に寝起きしていたが、大の男が何もしないでごろごろしているのは、実家を取っても扱い難いだろうし、私も何か収入を得る道が欲しい。そんな気持ちでいるとき、奥津にある木工所からお声が掛った。松阪を起点にしている支線に乗って、どの位の時間が掛ったか忘れたが、その支線の終点。山奥の村である。その時は取り敢えず引っ越しをし、暫く山奥の生活をした。今だったら国道354号線で飯南町を通り、高須ノ峰の峠を越えて行けば1時間も掛らずに行ける所で、松阪・名張街道の途中になる。

そこにどの位滞在したか覚えていないが、耐え切れなくて戻ったのか、旭製塩興業社の誘いがあったか戻ったのかは忘れた。それに、仕事の内容等はすっかり忘れた。生活のすべてを、街道の脇溝を流れる水に頼っていたことを覚えている。

5.2 圧縮製塩法の開発

家内の実家は、田舎も田舎。近鉄の各駅停車は止まるが、駅員がいないと云う場所だから、爆撃等は受けていないし街道筋も昔のまま。食料統制等何処吹く風で、食料に困ったことは無かった。そんな中、医者の特権でガソリンが使えたので、義父はオンボロのオースチンで往診していた。

昔、近鉄の名古屋・中川間が狭軌であった為、乗り換え駅になっていた中川駅の近郊の肥沃な田圃の真ん中に、「米銀」と称する昔ながらの米問屋があった。食管法も何処吹く風と闇米でこたま儲けた金で、旭製塩興業社と云う会社を作った。勿論任意団体。警察のOBを雇い、山を伐採して長島迄運び、大きな鉄鍋に海の潮を汲んで薪を燃し、ニガリの入ったままの塩を作って、三重県の味噌醤油業者に売っていた。

どう云う関係からか？多分、実家の隣の醤油屋から聞いたのだろうと思うが、私にお呼びが掛って旭製塩興業社製塩部長ということになった。物質的な待遇は大変よかったが、給料は何の位貰ったか、定かでない。給料より物の時代だった。白銀の飯は食べ放題、松阪肉は日常の食べ物だった。当時、三重県の味噌醤油業組合の理事長は、青木久四郎(世襲名)という方で立派な方だったが、塩が無ければ何も出来ない。文句を云いながら旭製塩の塩に依存していた。

毎日毎日、浜辺から潮を汲み、肩に担いで釜迄運び、清水組が山からトロッコで運んで乗る雑木を焚いて、浮かんでくる塩を掬い組合に届ける。この作業に、単身赴任の私は一寸嫌気がさしていた。一番馬鹿馬鹿しいことは、3%の鹹水(カンスイ)を6%位迄煮詰める時、空へ流している水蒸気の潜熱である。これが回収できれば一寸した技術屋気分になる。「米銀」が私を呼んだのは、恐らく漠然とそんなことを期待していたのかも知れない。そこで、確か 33 期第5分隊の京都・電気出身だったと思うが、近藤好弘に相談した。その後の或る日、釜場に行き見て驚いた。釜に蓋をして発生した蒸気が、釜の鹹水の中を通過して外へ出る様に作り上げていた。

「どうしても、お前の云う通りにならんよ」

彼は電気屋である。

「そんなことしたって、100℃の水蒸気から沸騰している鹹水に熱が流れる筈がない。熱は低温から高温の方には流れないよ」

「じゃ、どうすれば良いんだ」

「この話は蒸気工学！菅原菅雄先生に相談しようよ」

近藤君は京大出身。何処をどう連絡を付けたかは解らないが、程なく京都大学の菅原菅雄先生を訪問することになった。その近藤君、私が三重県にいる間に、死去したとばかり思っていたら「技術科第三十三期会名簿」には、チャント載っていて、元三菱重工業(株)勤務三重県津市栄町 3-305 で電話番号も 0592-27-5951 と記載されている。若し、これが最近のデータであれば、こう云う人は長生きする。電話でもしてみるか。

菅原研究室でご説明した後の菅原先生の第一声。

「お前、俺の作った蒸気表を勉強したか？」

ご説明する迄も無く、鹹水の蒸発温度より高い温度で凝固する様に蒸気を圧縮すれば、蒸気の潜熱は鹹水に流れ、蒸気は水滴となって出て来る。当然のことである。結局菅原研究室の一つのテーマとして取り上げて下さることになった。先生は日立製作所と交渉され、3%の海の潮を 6%の鹹水に迄煮詰める装置、即ち塩田の代わりをする装置を、圧縮製塩装置と云う名称を付けて開発し、日立の海岸で実験して下さって成功した。これが日本から塩田が消滅した最初のキッカケである。本当に塩田を消滅させた原因になったのは、後に開発された浸透膜方式で、この方は浸透膜の両脚に電圧を掛けて置けば良いので電力が要らない。この浸透膜方式が、日本から塩田を駆逐する結果となった。香川県新居浜の塩田跡には、世界一大きい振動実験台が設置され、原子力の球形容器の設計に貢献した。あの広い塩田の真ん中に作った振動試験機でも、実験が始まると街に振動が伝わるそうである。

圧縮製塩機の2台目が作られたと云うことは聞かない。多分、スケールの問題の解決が出来なかったのでは無いかと想像している。

闇商売という物は酷く儲かる物と見える。旭製塩興業社は、私が京都の街を行き来するのに、なんとパッカードを1台用意して呉れた。生まれて始めて乗った高級車パッカード。小学生・中学生の頃、溜池にパッカードの店があった。ボンネットの先端に赤い6角のマークの付いたパ

ッカード。何時も「こんな車に乗るのは、どんな人なのだろうか」と思っていた。京都市内を走るこのバッカードは、当時道路の中央に花崗岩で保護され、一段高くなっていた市電のレールを横切る時、何時横切ったか解らない位揺れない。私の乗っている座席の前には、運転手席との間を隔てるガラス戸を背にして、こちら向きの席が設けられていた。

当時は、京都・松阪間は日帰りが出来なかった。菅原先生は三木半と云う宿を世話して下さった。宿の女将は未亡人だと聞いたが、パンパンのはち切れそうなお腹をしていた。番頭さんの子供だそうである。その宿で一番上等な2間続きの部屋の、床の間付きの方に通された。襖一つ隔てた次の間には別の客が泊まる。それだけ当時京都の宿は混んでいた。食事を下げる時、女中さん曰く

「今日はお隣さんは新婚さんです。お早くお休みください」

お早くお休み下さい所ではない。一晩中悩まされた。

5.3 頬白の大群

鳴き声が「一筆啓上仕り候」と聞こえると云う頬白の大群が、海岸に築いた釜の辺りに、時々やって来る。100羽以上の大群で、木立から草むらへ、海の方へ飛び立っては、海岸の木立へと移って行った。田舎のごく当り前の風景であるが、これが私には、後々迄も怪しい印象の象徴の様に記憶に残った。旅行で海岸に行くと、時々頬白の大群が飛び交うのに出会うことがある。その時、必ず怪しさを感じ、紀伊長島の海岸を思い出した。

紀伊長島は、ぜんぜん戦争とは無関係であった様な辺鄙な漁村。だから魚は食べ放題、海岸から直ぐに山林が続く林業の町である。其処の山持ちの家が並大抵でない豪華さ。時々、其処にお呼ばれで、色々の話をお聞きした。

戦後、占領軍が先ずやったことは農地解放である。ところが山林には手を付けなかった。その所為か、長島は誠に落ち着いた町で、豪華な大邸宅を構えて居る山持ちの小柄な御主人は、山の経営に就いて、凡そ気の永いお話をして下さった。とに角、毎年決まった時期に植林をするのであるが、これは自分の代には伐採する事がないと云う。孫の代の為に行う仕事なのだと云って居られた。こう云う伝統は、どうやって受継がれるのだろうか。

今や林業も、農林省の変てこな指導のお陰で、全国の林業が危機に瀕している。あの山持ちの方の山林は、今はどうなっているだろうか。品の良い小柄な御主人の顔が浮かぶ。